真宗大谷派岐阜教区

岐阜同朋 ぎふどうぼう

- 今 なぜグリーフケアがさけばれるのか
- コラム しょうしんげ
- 同化と共生―共なる世界を願って～北海道開拓・開教とアイヌを考える～
- 「同朋の会」ノスヽメ（多治見市・浄念寺）
- My Book

2020.02 122

北門開拓 中山峠の現如上人之像　　北海道虻田郡喜茂別町川上

My Book

「1965年を境に日本人はキツネにだまされるという能力を失った」

かつて、日本人はキツネにだまされながら生活をしていた。このことを意味するものは、私たち日本人が自然との共生の中で生活をしていた事実である。大自然の中に霊性や生命の根源を感じ、それらを「神」と表現していた。「神」はしばしば動物に降り立ち、何かしらのメッセージを伝えるものだと考えられていた。■

安倍晴明（あべのせいめい）が陰陽道（おんみょうどう）で絶大なる力を持てた説明として母がキツネだと言われた。

ここからキツネの能力が最も優れているという伝承となっていった。■

その転機である1965年からキツネにだまされた話が新たに出てこなくなった。

高度経済成長の最中、家電の普及や農機具の機械化、薪は灯油やプロパンガスへ、炭焼に従事していた人々は職を失い町へと移り住み、意識は山から都市へと向けられていった。

それにともない村の「通過儀礼」が失われ大自然から学び得た「知恵」が伝わらなくなった。

科学的知見で見いだされたものだけが唯一の真理であるという認識になっていった。「人間はなぜ生きているのか」という問いに対して、身体的構造のなかでしか明らかにできないにもかかわらず。■

自然界では他の生き物を殺さなければ食べることができない。

リスやネズミは食料を備蓄する習性があるが必ずしも食すわけではない。忘れていると言えばそれまでだが、おかげで木々はより遠くに子孫を繁栄させることが可能になる。

しかし人間は蓄財や権力などを考える。■

かくいう私は、祖母の畑仕事を手伝うまで野菜は冷蔵庫に有るものだと思っていた。ニジマスのつかみ取りを体験し自分でさばくまで家畜や魚が肉になるという認識はなかった。

自分で命のやり取りをしたことのない人が果たして本当に命を尊び罪深き自分を見つめることができるのか。命を頂いている事実は自分で体験しなければならない。

煩悩（ぼんのう）のままに振舞うことを肯定する罪深い人間がここにいる。

そうであるから人知（じんち）を超越した仏智（ぶっち）をもってしなければ自身に向き合っていく事などできないのではないか。■

自然とのつながりが希薄になっていく中で、自身の生命が他と異ならず自然の中に共有されていると感覚する能力が失われていった。

このことの象徴が「キツネにだまされなくなった」という事であった。

現代人には理解し難いだろう、しかし素朴で暖かく悲しいとても大事なことであった。

「つながりある私たちである」という感覚をつい忘れて生きている私に刺さるものがあった。

編集後記

「えっ、お寺で結婚式?? 何で?」と、この秋、本堂で結婚式を希望していたカップルの新婦のお兄さんからの言葉。

「全然イメージ出来ない」と。

おめでたいことは神前で、そうでないことは仏前でと、暗黙の了解があるようです。

今は教会（風?）で、キリストの前。殆どのカップルはキリスト教徒ではないはずですから、やはりイメージ優先の成せるわざなのでしょう。洋の東西を問わなければ、キリストも神様も違いがない??って聞こえてきそうです。

でも、子どものころから『かけがえのない命』を見守り続けてくれたのは父母祖父母の深い愛情であって、その奥底に阿弥陀様の慈悲心が息づいていたのではないでしょうか。

結局結婚式は、ホテルで行われた。

お寺で結婚式、いいのにね…。

（おが）

発行・編集：岐阜教区出版委員会　真宗大谷派岐阜教務所　出雲路善公　〒500-8054 岐阜市大門町1　TEL.058-266-1378

本誌に関するご意見・ご感想をお待ちしております。

今 なぜグリーフケアがさけばれるのか

最近、「グリーフケア」という言葉をよく目にするようになりました。宗門でも「グリーフケア」に目を向けています。この「グリーフケア」とは、どういうことでしょうか。

グリーフ〝grief〟は、深い悲しみや悲嘆を意味する英語で、その語源は「重い」を意味するラテン語の〝gravis〟であり、その後フランス語を経由して変化し、「心は悲しみで重くなった」という意味を表すようになったと言われています。つまりグリーフケアとは、大切な人との死別によっておきる深い悲しみ、悲嘆に陥った人が、その悲しみ、苦しみを抱えやすくするように側にいて支援・援助することです。それも一方的に励ますのではなく、相手の気持ちに寄り添う姿勢が大切で、そのように支援・援助する事をグリーフケア（悲嘆の援助）と言います。

では今、なぜ「グリーフケア」が取り上げられているのでしょうか。

大切な人との死別は今に始まった事ではなく、大切な人、かけがえのない人を亡くすという事は、昔より人に課せられてきました。そんな時、家族や親戚、友人、地域の人々など、悲嘆にくれる人の側で支える人がいました。しかし今日の社会では、「時間・空間」が共有されにくくなってきています。個人の時間と空間が優先され、家族間でも「時間・空間」の共有が少なくなっています。大家族の時代には、家族内でも癒す関係がありました。しかし核家族化が進み、家族内での癒しの機能が減じてきています。

また現代は、人間関係の希薄化が進んでいると言われています。携帯電話・スマートフォン等のメディアの発達によって、人とのコミュニケーションもメール・ラインという文面へと変化を遂げています。直接対面する機会も減り、電話で話す事も減りつつあります。こうした事も、人間関係の希薄化につながっていると考えられます。また地域コミュニティーの低下もあります。低下の原因は様々あり、そういった原因一つ一つに、希薄化の要素があると思われます。

こうした事が、悲嘆のケアの低下にもつながっていると思われ、一時的には悲しみの心に寄り添っても、長期にわたって寄り添い続けていく事がなされなくなりつつあります。

このようなこともあって、悲嘆者に対する社会の理解が乏しくなり、ケアする人が少なくなってきた……、それゆえ、今グリーフケアの必要性が認識されてきていると思われます。

大切な人、かけがえのない人と病気・事故・災害・自死などで死別した時、悲しみだけではなく、不安や孤独、自責の念など様々な感情も重なって、さらに苦しみや辛さが重くなる場合もあります。

一人で悲しみ、苦しみ、辛さを抱え込んでいるのではなく、人に話すことによって気持ちが落ち着き、心が穏やかになりやすくなります。考えがまとまり、整理がつきやすくなります。そして生きる力と意味が見出されていきます。そのためにはそばで話を聞いてくれる人、寄り添ってくれる人、答えの必要ない「寄り添い」が求められます。

「グリーフケア」という名は使われていませんが、寺院も悲しみを抱える人に寄り添ってきました。亡くなられるとすぐに枕勤め、通夜、葬儀、毎七日、月忌、満中陰、年忌等。中でも毎七日は悲しみの直中において、読経し、そして悲しみを抱える人の話を聞き、悲しみを受け取り、心を寄り添わせていく、そんな時間を大切にしてきました。「グリーフケア」が取り上げられている今、私達の身近な仏事の重要性を再確認していく機会でもあると思われます。

鍋島直樹先生（龍谷大学教授）は、仏教公開講座（令和元年9月20日）で次のように述べてみえます。

大切な人との別れは、身を切られるようにつらい。時を経ても悲しみはますます深まるばかりで、どうかあの時まで時間が戻ってほしいと心の中で叫ぶこともしばしばである。それでは、死別による悲しみを私たちはどのように受けとめたらよいのだろうか。

「愛別離苦はあらゆる苦しみの根本である。愛が深ければ深いほど、より一層憂いも深くなる。」と『涅槃経』に説かれている。『口伝鈔』によると、親鸞聖人は死別の悲しみの寄り添いを、次の三つの角度から説かれている。第一に、悲しい時には泣けばいいと。第二に、悲しむ心を少し休ませないと。第三に、死を超えた依りどころが心の中に生まれると、悲しみと共に生きていけるようになると。

「死別」の悲しみ・苦しみの辛さの声に耳を傾け共感し、決して励ましたり、気持ちを抑え込むような事を発することなく、心を重ねて寄り添い、ありのままに受け容れていくグリーフケア。このグリーフケアの目標は悲嘆から立ち直ることではありません。悲しみをもったまま生きていく、それを支える事です。

グリーフケアという言葉を使わなくても、一人ひとりが悲嘆の心に寄り添っていく、支えていく、そんな社会になる事を願わずにはいられません。（臨床宗教師）

コラム しょうしんげ

道俗時衆共同心 唯可信斯高僧説

すべての人々が共に心を同じにして、高僧らが伝えてくれたたった一つの阿弥陀仏の教えを信じてほしい（私訳）

地元に帰り、気が付けば今年も終わりを迎えようとしている。京都の大学に進学し大阪で就職した私は人生の半分以上関西で過ごしことになる。いずれ地元に帰り家を継ぐ決意の中、結婚し子供を授かり大阪での生活を送っていましたが、いざ地元に帰ることになったとき、思い通りにはいかないことだらけでした。

両親は早く帰って仕事を手伝ってもらいたい。子ども達は生まれ育った大阪を離れたくはない。妻は私の気持ちも理解の上で子どもにも無理強いはさせたくない。私はいずれ帰らなければならないのだから仕方のない事であり、家族の事も考えての決断なのに何故まわりは理解してくれないのか?各々が自分の気持ちばかりを優先し心がバラバラな状態でした。結局、私一人が先に実家に帰り少しの間家族と離れて生活することになりました。

季節が変わり、夏休みに入った頃、妻から連絡がありました。「子供たちの心に変化があり、岐阜に行っても良い」との事でした。時間をかけゆっくり子ども達と向き合い話を聞くことで気持ちに変化があったそうです。すべてが納得しての答えではないでしょうが感謝の気持ちでいっぱいでした。と同時に、今まで自分の行いや思いを家族の為として押し通そうとしていた事に対して申し訳ない気持ちにもなりました。家族の不安に対しても「私が解決できる。」その傲慢な気持ちが相手の話を聞いていたつもりで何も聞いてなく、周りの気持ちを考えていなかったことに気付かされました。私が心をバラバラにしていた中心だった。私自身が家族を信用していなかったのかもしれません。

お念仏の世界でも心をひとつにするという事は、各々が好き勝手やるという事ではなく互いが互いを認め合うことではじめて心をひとつすることができるのではないでしょうか。またそこにはすべての人が分け隔てなくという思いも込められているのだと思います。

相手を認める為には私のように自分の意見ばかり押し通そうとしていてはいけないのです。相手の声、気持ちをしっかりと聞いていく。正信偈にあるように高僧らが伝えてくださっている阿弥陀仏の願いを聞いていく。信じてほしいという聖人の願いでもあるではないでだろうか。今回の出来事で自分の勝手さに気付き、改めて家族の大切さを知るご縁をもらいました。

今後も困難に直面した時でも、家族心をひとつにして先達者の教えに耳を傾けお念仏の生活を歩みたいと思います。

同化と共生―共なる世界を願って

～北海道開拓・開教とアイヌを考える～

尾畑英和

渡島州函港着帆（おしましゅうかんこうちゃくはん）
この図は、現如上人が「北海道」に足を踏み入れた一歩目から、現如上人＝貴い人という位置付けが強調されている図である。しかし当時の現如上人一行を迎えた一般の側の資料は発見されておらず、本当に出迎えの人々が「泣悦」で迎えたのかどうかは不明である。

ある中年のアイヌの方がおっしゃった。

「私の娘はきっとシャモと結婚するだろう。そして、生まれた子どもたちもきっとシャモと結婚するだろう。そしたらもうほとんどわからない、そのころになればもうアイヌなんていたのかな、という時代になるよな。」（シャモ＝和人・アイヌに対する語）

アイヌとしての自分の存在を消していく、そうでなければ生きていけない差別と偏見の人生。もし私たちが、今突然知らない外国人が日本にやってきて、暴力的支配のもとで、明日から日本語禁止、仏教は禁止、文化を奪われ、彼らの生活スタイルを強要され、宗教を押し付けられ、野蛮な民族と罵られ、日本人としての誇りを奪われたならば、どうであろう。生きるためには、その誇りをすてて、家族のために、自身のために〝同化〟せざるを得ないのでないか。それは人間として、日本人として生きることの否定、〝死〟を意味する。

現如上人肖像（札幌別院蔵）

1977（昭和52）年の大師堂（現・御影堂）爆破事件での犯行声明、「天皇制日本国家の存在としての侵略と搾取を支持・容認・黙認してきたすべての宗教に対する断固たる批判」を受けて、私たちは、明治以降の宗祖の精神を喪失してきた大谷派・宗門人の歴史にあらためて出会い直すこととなった。

蝦夷地では、1456年アイヌの青年が不当に和人に殺害されたことによっておこった「コシャマインの戦い」以降、アイヌと和人との戦いが100年以上続いた。江戸時代になると、徳川幕府から松前藩がアイヌとの交易の独占権が与えられたが、そこでも多くの侵略行為や搾取が行われていたといわれている。明治時代に入り、国は、赤蝦夷人（ロシア人）からの侵入を防ぐこともあり、蝦夷地を国に帰属させるため北海道開拓事業を進めることとなる。それは、皇民化政策という名のもとに蝦夷の先住民を帰属（同化）させていくというものであった。徳川幕府の庇護を受けていた東本願寺は、それ以降の宗門の安泰を期すため、また、新たに新天地での開教を行うため、「国恩に報いたい」という願いを示しつつ北海道開拓に踏み出すことを決めていく。

1870（明治3）年、時の東本願寺法嗣現如上人（大谷光瑩）が、開拓・開教の志を立てて、「新道切開」・「移民奨励」・「教化普及」という願いのもと京都から札幌の地に足を踏み入れた。開墾作業は並大抵のものではなかったが、多くの日数・財を費やし、現如上人のもと、開拓移民（和人）・先住民のアイヌの力を結集して行われた。札幌の地に堂宇を建立し、「本願寺道路」を建設し、見知らぬ地に開教の歴史を刻んでいくのであるが、先住民であるアイヌの人々は、強制労働、和人との扱いの差異等、差別と偏見の中で深い苦悩を強いられていく。

現如上人が教化の先頭に立ち札幌の地を踏んだ時、2戸7人の和人が定住していたと記録にある。今では想像がつかないが、札幌は野生の動物が出没する原野であったに違いない。そこは、古くからアイヌの人々が集落をつくり、穏やかに暮らしていた地であったであろう。

その後、急速に多くの移民が流れ込み、この東海北陸地方からも数多い開拓移民が北海道に足を踏み入れた。念仏の教えは、寒さと厳しい生活を強いられた移民の心の拠りどころとなった。しかし、その歴史の中で、開拓移民である和人は、先住民であるアイヌの人々から土地や財産を搾取し、アイデンティティを奪い、彼らを軽視し、劣等視していった。「むくつけき姿（鬼や怪物のように形や性質が異様で不気味）」と罵り、望んでいない人びとに「物の哀れを知らぬ蝦夷人を済度」と強制的に押し付けていくやり方で、アイヌの人々を虐げ、地べたに座らせ、酒とともに名号を下付し布教していった様子が、東京「甘泉堂」から出版され、1972（昭和47）年の現如上人50回忌法要の記念品としても復刻された「東本願寺北海道開拓錦絵」（全19枚）に表現されている。

現如上人一行が、明治天皇のもと皇民化政策の一端を確実に担いながらも、様々な苦難を乗り越え、宗門の危機をかいくぐり成し遂げた北海道開教をどう評価するかは難しいところで

北海道新道切開（ほっかいどうしんどうせっかい）
新道切開の様子を表した一枚。僧侶、役人、人夫、アイヌ民族が協力しているように見えるが、実際には人夫として、現地のアイヌ民族が雇われたと考えられる。ただし、賃金などの対価の詳細は不明である。

札幌本府（さっぽろほんぶ）
七條袈裟を着用し合掌している立姿の現如上人、しゃがんでいる随員達、そして地面に平伏するアイヌ民族。このように描くことで、尊卑の差を表そうとしている。さらに詞書では、仏法僧という鳥の出現を取り上げ、現如上人が仏の権化であるとしている。

あるが、江戸幕藩体制から明治新政府へと社会全体が大きく激変していく中にあって、また、廃仏毀釈という厳しい時代状況を考えた時、教団、宗派からの視点をもって判断したならば、それは大きな成果であったとも言える。しかし視点を変え、アイヌ民族から見たこの一連の宗派の施策は、彼らの人間性を奪い、心を奪い、上位下達の教化の押し付けであったとも言える。

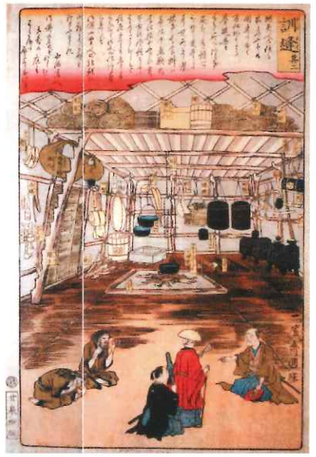
現在アイヌの血を引く人々が20万人いると言われているが、自身がアイヌ人であることを名乗っている人は2万4千人に過ぎない。それは、生活の中で、就職（職場）・結婚（交際）・進学等、今なお多くの差別と偏見があることを示している。

アイヌ語で「神」を「カムイ」と言う。「アイヌ」とは、アイヌ語で「人間」という意味だ。「アイヌモシリ（母なる豊かな人間の大地）」を和人が奪い、搾取し続けた歴史、教団・宗派がその国策に少なからず加担した歴史を学び直した時、私たち宗門人の今後の歩みにおいて歴史から大きな課題を突き付けられていると言えるのでないか。

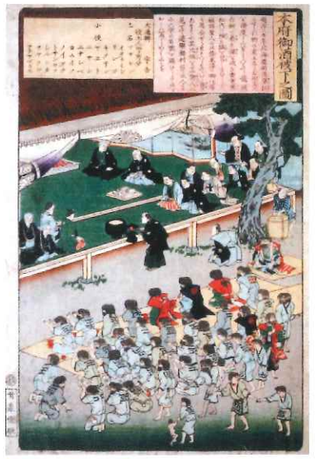
過去のできごとを現在の価値観で即判断すべきではないが、「同朋社会の顕現」という大きな課題を担う宗門がこの歴史と向き合い、アイヌの人々が今なおアイヌと名乗ることさえ厳しい社会の現実の中で、歴史を生きてきた人々の悲しみを自らの悲しみとし、共に認め合って生きることが願われているのでないか。

落部村（おとしべむら）
現如上人一行が落部村（現・八雲町）を通りかかった時の図。アイヌ民族が跪いて海産物を差し出すさまを描くことによって、現如上人を歓んで受けいれているように誇大な表現をしている。

訓縫（くんぬい）
アイヌの人々や熊がひれ伏す姿を描くことにより現如上人を超人のように見せ、威徳があったと示そうとしているような雰囲気を醸し出している。



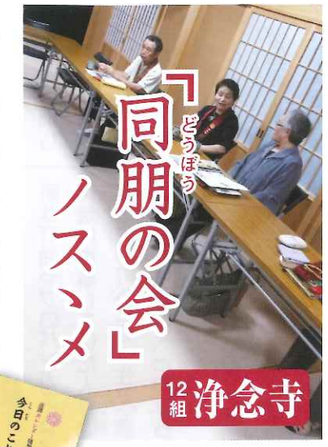
訓縫 其二（くんぬい そのに）
現如上人がアイヌ民族の住居の中で、流罪にあわれた親鸞聖人を思いながら、宗派や現如上人の行動を照らし合わせ、美化、吹聴し、正当化している。



本府御酒被下之図（ほんぷごしゅくださるるのず）
この絵は、アイヌ民族に酒と六字名号を与えて教えに導こうとしているものである。アイヌの人々はどう理解したであろうか。またこのことが「教化」になったのだろうか？

アイヌのある方が、東本願寺の研修道場でおっしゃった。「私は、アイヌであることに誇りを持っている。私たちは、皆さんに北海道からビルを背負って出ていけと言っているのではない。皆さんとアイヌ・ネノ・アン・アイヌとして共に生きていきたいのだ。」

アイヌ・ネノ・アン・アイヌ（人間らしくある人間）として、差別を受けてきたものも、差別をしてきたものも、共に、「人間」として「解放」されていかねばならない。アイヌ民族問題から我々が問われ続けていることに対し、「浄土真宗」に生きることで応えていく、そんな歩みが願われている。



『同朋の会』ノススメ

12組 浄念寺

今回は、多治見市・浄念寺の同朋会をご紹介します。

浄念寺同朋会は真宗同朋会運動が始まる1961（昭和37）年以前の1957（昭和32）年に始まっており、50年以上も続いています。今でも毎月行われており、10人前後の方が参加されています。

同朋会は13時30分から始まります。真宗宗歌を斉唱した後、『大谷派勤行集（赤本）』を用いて同朋奉讃で正信偈のお勤めをします。和讃は毎月変わり、その日に集まられた門徒さんが交代で調声人を務められます。

日程の中心は『今日のことば』（東本願寺出版）をテキストにした座談会です。皆で『今月のことば』の法話を読んだ後、思ったことや分からないことなどを出し合い、それぞれの生活を顧みながら引っ掛かった言葉の確かめをします。

この日の「ことば」（10月）は〝「信心」というはすなわち本願力回向の信心なり〟。話し合いの中身は、「他力の信心」「信じるという能力」といったことについてでした。「人間は判別を止めることはできない。すべて自分でやっていると思ってしまうし、いつも私が正しいというところに立っている。そういう自分がいる」「仏さまにお参りするということは自分の力ではない。お参りする人の姿に教えられ、知らされるということが回向ということではないか」など、難しいテーマでしたが、さまざまな声が聞かれました。

テキスト『今日のことば』は、『法語カレンダー』（真宗教団連合発行）に掲載された親鸞聖人のお言葉についての随想集です。法語や随想が難しい回はなかなか意見が出ず、主にご住職が話を進めていくこともあるそうです。

教えの言葉をきっかけに、生活の問題に話題が及ぶこともあります。身近な人の死をどう受け止めたらよいか、家族の関係、夫婦の関係についてなど、具体的な事柄を教えの言葉に聞いていくことが大切な聞法です。

浄念寺の同朋会は、この座談会を大事にしておられ、座談の司会者は特に決めず、参加者の方が互いに聞きあう場が開かれていることが印象的でした。しかし、参加者が互いに声を聞き合う、意味のある座談会というのはなかなかできにくいものです。

次回は同朋会の形に工夫をし、試行錯誤しながら取り組んでおられるお寺をご紹介する予定です。